

# 宇宙人ジョーンズ?幻想 郷調査結果報告書《完 結》

ココナッツ・アナコンダ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この惑星には、強力なバリアーによって隔離された『幻想郷』という空間があるらしい。

そこは、『人間』と『人間ならざる者』たちが共存して生きる世界だという。

—— 一見の価値はありそうだ。

# 目次

調査記録：博麗神社	1
調査記録？紅魔館	7
調査記録？人里	14
調査記録？永遠亭	21
調査記録？迷いの竹林	26
調査記録？妖怪の山	34
調査記録？守矢神社	42
調査記録？命蓮寺	50
調査記録？霧の湖	58
調査記録？太陽の畑	67
調査記録？八雲家	73
調査結果：旧都	82

調査記録：地霊殿	90
調査記録：白玉楼	99
幻想郷調査結果報告書	108



# 調査記録：博麗神社

——この惑星の住人は、『食』というものに本当に貪欲だ。

「ちよつと魔理沙！ それ私が狙つてたお肉じゃない返しなさいよ!!」

「お断りなんだぜ。鍋つてのは戦争なんだよ、強くば食い弱くば悔う。ここはそういう領域だろ？」

「そのとおりだぞ〜霊夢。つまり、今みたいに隙だらけだと……こうだ!!」

「ああ〜っ!? また私のお肉が……萃香!!」

「ま、まあまあ霊夢さん。落ち着いて……」

——特に『鍋物』と呼ばれる料理に対して、その傾向がより顕著になる。

「せっかくの差し入れなのに……アンタら、許さないわよ!!」

「そうカッカすんなよ。ほれ、これやるから」

「いらぬわよキノコじゃない！」

「そうだぞ魔理沙、霊夢にやるならこれだろ？」

「違うわよバカ！ 豆腐なんてさつきから食べてるわよ!!」

「あの、霊夢さん……私のを差し上げますから……」

「ありがとね針妙丸。でもね、アンタに取り分けたやつは私には小さすぎるの」

「あう……」

——ただ水で食材を煮ただけのものが、何故こうも奪い合いに発展するのだろうか？

「……」

「あつ、うるさくしてごめんなさい。食材はあなたが持つてきてくれたものですし、遠慮なさらず食べて下さいな」

「イタダキマス」

「食材は私が装いますね——二人共！ お客様のぶん取るんだから大人しくしてなさい

!!」

「やなこと」

「酒出したら考えてやる」

「本っ当に 안타らしい度胸してるわよねえ……!」

——質がいいわけでもなく、別段味がいいわけでもない。

「マダマダ有リマスカラ」

「だつてさ、なら遠慮しないぜ」

「……ハア、もうため息しか出ないわ」

「ほう、二言は無いな霊夢? よし魔理沙あ! 針妙丸う! 霊夢は食欲も出ないみた

いだから鍋全部三人で食つちま——」

「え? ごめんよく聞こえなかった」

「ごめんなさい冗談ですから封魔針でグリグリしないでくださいお願いします」

「つたく……お酒持つてくるわ。魔理沙と針妙丸は飲む?」

「勿論!!」

「私は止めておきます」

「そう……ジョーンズさんはどうなさいます?」

「遠慮シテオキマス」

——なのに、競争のように取り合う価値があるのだろうか？

「持ってきたわよ」

「うひよ、酒だぜ酒！」

「霊夢、早く早くう！」

「急かすんじゃないわよ。——はい」

「待つてましたあ！」

「よおし、それじゃあ——」

「「かんぱあ——い!!!」」

——実に不可解だ。

「……グウ……」

「すびー……すびー……」

「さ……さけえ……まてえ……グへへ……」

「……皆さん、騒ぐだけ騒いで寝ちやいましたね」

「……」

「もう少しお話したいですけど……起こしちや悪いですし、縁側まで移動しましょう」  
「ワカリマシタ」

——ただ……。

「ん、夜風が気持ちいい。雲もないから星も綺麗に見えますね」

「……」

「あれ、それは何ですか？」

「缶コーヒー」

「へえ……これが話に聞く……美味しいんですか？」

「オヒトツドウゾ」

「え、いいんですか!?! あつ、でもそのままだと量が多いので、この枕をお願いします」

——満天の星を眺めながら飲む缶コーヒーは……。

「エへへ、ほろ苦い……でも、何だか優しい味がしますね」

——格別の味がする。

## 調査記録？ 紅魔館

「今日からウチで働いてくれるジョーンズさんよ。みんな、仲良くね」

「男の人？」

「なんかね、レミリア様が直々に連れてきたんだって」

「へえ。やつぱり仕事はメイド長の咲夜さんが教えるのかな？」

「はいはい、無駄口はそこまで——」

——この惑星の住人は、やたらと自己の存在を誇張して見栄を張りたがる。

「咲夜！ カリスマたるもの、いつ如何なる時にも威厳と風格を携えていなければなら  
ないわ!!」

「流石でございますお嬢様」

「いい？ 生きとし生ける生命体の頂点に君臨する私には、それ相應の——ぶぎや!」

「だ……大丈夫でございますか？」

「ううう……転んじやった」

「擦りむいておられますね……傷の手当をしましょう。こちらへ」

「……アレある？」

「お花の絆創膏でございますね？ ご用意は出来ております」

「ワアーイ!!」

——身の丈に合わない態度、言動を取り、そして自分の首を締めていく。

「ねえ、パチエ？　なんかこう……カリスマツ!!　って感じの魔法とか無いかしら？」

「また無茶な注文を……パチユリー様、そんなのありました？」

「さあ？　探せばあるんじゃないかしら？」

「……一考の価値はありそうね。ジョーンズ、何冊か見繕ってきなさい」

「ワカリマシタ」

「アシスタントに小悪魔をつけ……うお!!　目がなんか光ってる!？」

「コレトコレト……アト、コレデス」

「へ？　——え、ああ……ありがとう」

「へえ……便利そうな奴ね、レミイには勿体無いわ。どう？　図書館の司書にならない

? あなたとこあの二人がいれば捗るんだけど」

「執事ノ仕事がアリマスノデ」

「そう……残念ね」

「……あの、お嬢様? この方——」

「新米執事のジョーンズよ。中々の掘り出し物だと思おうわ」

「いえ、そういうことではなくて……あ、やっぱりイイデス」

——偽り、取り繕わなければならない仮面に、なんの価値があるのだろうか?

「ぎやおく!! 食くべちやうぞく!!」

「きやあー! お姉様怖ーい!!」

「待ちなさくい、フラッソン!」

「お嬢様、妹様、お食事のご用意が出来ました」

「あら、早かったわね」

「ジョーンズのおかげでございます」

「今日はなぐに?」

「ハンバーグデス」

「お嬢様の計らいで、今日は妹様の好物にするようにと」

「本当!? お姉様だーいすきー!」

「フフツ、可愛い妹のためだもの。それくらい当然のことよ」

「さあ、冷めてしまいますので広間へ向かうと致しましょう」

「うん! お姉様、早く行きましょう!」

「フランったら……もう、仕方ない子ね」

——ただ……。

「お嬢様の見栄っ張りにも困ったものだわ。けれど、何ていうのかしら……放っておけないっていうの? まあ、手のかかる妹みたいな印象が強いわね」

「レミイは魔法を何でも出来る万能マシンと勘違いしている節があるのよね。だからいつも変な注文ばかりしてくるし……でも、あんなに瞳を輝かせて期待されると、ついつい応えたくなくなるから厄介だわ」

「なんだかんだ言つても、ちゃんと話は聞いてあげてますしね」  
「うるさいわよ、こあ」

「私さあ、もうあんな『ぎやおー!』とかで喜ぶ歳じゃないんだよねえ。それに、確かにハンバーグは好きだけど、そればつかだと流石に飽きるっていうか? でもさ、かと言つて下手なこと言うとお姉様泣いちゃうじゃん? もうヤンなっちゃうんだよね。ホントどうにかならないものかしら……ちよつとジョーンズ、お姉様にそこはかどなく進言してみてくれない?」

——この惑星の見栄っ張りは、優しさによって生かされている。

「どうでしたか紅魔館は？」

「……才前カ」

「いい所でしよう？」

「中々、面倒ナ所ダ」

「面倒もお嬢様のワガママくらいでしように……あの人もあの人なりに良い所があるんですよ？」

「……大分コノ惑星ニ染マツテルナ」

「貴方に言われるとは思いませんでしたよ。調査は終わりそうですか？」

「イヤ、マダダ」

「知れば知るほど奥がありますからね。この惑星の住人は」

「……フン」

「あつ、缶コーヒーですか？　そう言えばハマったって言ってましたね。お一つ貰つてもっ。」

「……受ケ取レ」

「ありがとうございます——うくん、やっぱり咲夜さんが淹れてくれたものの方が美味しいですね」

「才前ハ変ワランナ」

「流されやすいのは自覚してますよ。でもこれが私なんです」

「殲滅ガ決マツタラドウスルツモリダ？」

「さあ？ 多分、門番としての役目を全うするだけじゃないですか？」

「……」

「貴方も気をつけておいた方がいいですよ？ 貴方と私はよく似ていますから、下手するとどっぴり浸かってたなんてことになりかねません」

「肝ニ銘ジテオコウ」

「まあ、それでも後悔することはないと思いますけどね」

「……才前ハ変ワランナ」

「さつきも言ったでしょう？ これが私ですよ」

## 調査記録?人里

——この惑星の『市場』と呼ばれる場所には、常に騒音が満ち溢れている。

「へい安いよ安いよお！ おつ、奥さん美人だねえ。うちの野菜は栄養満天！ 食べれば美しさ倍増間違いなしだよ!!」

「採れたて新鮮！ 上質な牡丹肉が入ったよ！ 本当なら少ーしお高いところ、今日はなんとお……こんなもんで売っちゃうよお！」

「ええ!! お宅の旦那さん、ぎっくり腰やっちゃったの!？」

「そくなのよ、しかも結構深くいつちやったらしくてね？ 誰かの手を借りないと満足に起き上がることもできなくて。やっぱり永遠亭に連れて行くべきかしら？」

「おおい、早く来いよ！」

「待つてよーお兄ちゃん！」

——絶えることのないこの雑踏は、耳障りなことこの上ない。

「ええーつと、聞いた話だと——あつ、多分あの人だと思う」

「ホントだ凄い！ 私、ガイコクジンの外来人って初めて見るわ！」

「ちよつと小鈴？ その言い方は失礼よ」

「とか何とか言つても、阿求だって浮足立つてるの丸分かりよ？」

——騒いだ所で売上に影響が無いのは、外の調査で把握済みだ。

「あの……ジョーンズさん、ですか？」

「私デス」

「お話をお伺いしたいのですが……お時間空いてらっしゃいませんか？」

「空イテマセン」

「そこをなんとか……」

「ごくんな可愛い女の子二人とお茶できるんですよ？ こんなチャンス滅多にありま

せんよ？」

「結構デス」

「ガアーン!? そんなあ……私たちがまだ子供だから!?」

「いんや、こいつはこれからお仕事なんだよ。悪いなお二人さん」

「あつ、霧雨商店の……」

「親父サン」

「おうジョーンズ、着替えてきな」

「ハイッ！」

——何をそんなに騒ぐ必要があるのか……？

「やあ、親父殿。それに阿求に小鈴も」

「おお、慧音先生じゃないか！ しばらくぶりだなあ！」

「お久しぶりです先生」

「おっ久々！」

「先生はお買い物ですか？」

「ああ、それもあるが……以前、親父殿に店の売上が右肩下がりのを聞いてな。進展はあったのかを聞きに来たんだ」

「ああ……それなあ、全っ然ダメなんだよ。まだヤバいところまでは行つてねえけど、そろそろなんか対策しねえとマジで首が回らなくなっちゃうぞうだ」

「消耗品でもなければ、道具は一度買うと壊れるまでは買い変えませんか。小鈴、何かないの？」

「うちの貸本屋は万年火の車だよ！」

「そ……そう……。でしたら先生は？」

「いや、商売だと私も力になれなくてな。やはり、誰かその手の知識のある者に——」

「食い逃げだあ！ 誰か捕まえてくれえ!!」

「邪魔だ、どけえ!!」

「え?——きやあ!?!」

「阿求!!」

「貴様つ……待——」

「待テエ!!」

「ジョーンズ!?!」

「うっそ……腕伸びてる!?!」

「は?——ぐへえ!?!」

「よし、襟元を掴んだ!」

「ジョーンズさん妖怪だったの?」

「詮索は後にしろ小鈴！ 今は阿求の手当が先だ……親父殿!!」

「応っ！ ふん縛ってくるぜ！」

「任せた！」

「ジョーンズ！ 今月はボーナス期待しとけ!!」

「アリガトゴザイマス！」

——ただ…。

「これ下さい！」

「あいよ！」

「ちよつとお会計まだあ!？」

「少々お待ちを！ ——阿求ちゃん!!」

「は、はいい〜！」

「小鈴ちゃんはこのつち手伝ってくれ！」

「ひゃあ〜、目が回るう〜」

「賑わってるな親父殿」

「おう、慧音先生！ いや、数日前とは大違いさ」

「それもこれも彼のおかげか」

「ああ、まさかジョーンズにこんな策があったとはなあ」

「どれ、私も手伝おう」

「助かるぜ！ じゃあ、ジョーンズと代わってやってくれ。あいつ、ずっと出ずっぱりな

んだ」

「わかった」

——この惑星の住人はどこに行っても……。

「イチキュツパ！ イチキュツパダヨ！」

「ジョーンズ、売り子を代わろう。休憩してこい」

「ハイ」

「それとほら、缶コーヒー……だったか？ 冷やしておいたぞ」

「アリガトゴザイマス。休憩入りマス」

「いってらっしゃい。——さて……今日は安いよお！ イチキュツパ！ イチキュツパ  
のお値打ち価格！ 今買つとかないと後で損するよお!!」

——変わらず、イチキュツパが大好きなようだ。

## 調査記録？永遠亭

——この惑星の『薬』と呼ばれる毒物には、甚だ感服させられる。

「それではお薬出しておきますね？」

「あの、永琳先生……ぎっくり腰って薬で治るんモンなんですかい？」

「私の調合した薬でしたら治りますよ。ただ当然、2、3日の安静は必要になりますけれど」

「そ、そうですか！ 助かります！」

「それが私の仕事ですから——はい。お薬の方、こちらになります」

「ありがとうございます！ ……ああ、こいつあ、どう使うんで？」

「患部に湿布を貼り付けるときに接着面に塗りつけて使用してください。湿布は市販のもので構いませんので」

「分かりやした」

——人体そのものに悪影響を与えない毒物を投与し、活性や殺菌、また有害物質の消毒を促している。

「すみません、ありがとうございます。ほら、しっかりと捕まりな？」

「へへ、すまねえなあ」

「そいつは言わない約束だよ？ それでは失礼します」

「お大事に」

——『毒をもって毒を制す』という言葉の通り、原始的ではあるが実に有効的な手段だ。

「さて、と……うどんげ！ ちょっと来てちょうだい！」

「はぁーい！ ——どうなさいました師匠？」

「今日の予約客たちはまだ残っていたかしら？」

「いえ、それでしたら先程の夫婦で最後となっています」

「そう——なら、急患が来なければ時間は空いてるわけか……」

「そうですね」

「じゃあ、最近忙しくて手を付けられなかった新薬の開発でもしましょうか。うどんげ、手伝いなさい」

「はい！——あつ、ジョーンズさん。残りの掃除は任せてもいいですか？」

「大丈夫です」

「すみません、お願いします」

「うどんげ、行くわよ」

「はい、すぐ行きます！」

——ただ……。

「あの……師匠？ 私はお手伝いのはずでは？」

「そうね。確かにそうお願いしたわ」

「では何故、私は椅子に縛られているのでしょうか？」

「薬の形は出来ていたの。ただ薬品の場合、それで完成とはいかないじゃない？ だから誰かで実け——試飲して正しい効果が出るかどうか確かめてもらわないといけないな

かったのよ」

「ああ！　今、実験って言った！　やっぱり私をモルモットにするつもりなんですかね!？」

「やーね、うどんげ。流石にウサギをモルモットに変える薬なんて作ってないわよ」

「違います！　そういうことじゃなくて……それに私、このあと友人と飲みに行く約束があるから薬が残つてると困るんですう!!」

「なら安心なさい。今回試すのは精力剤だから」

「どこに安心する要素があるんですか!?!　お酒入るって言ったじゃないですか!?!」

「と言っても、性的な方面よりも活力を滾らせる方面に重きをおいたから、発情するなんてことはないと思うわ」

「あつ、そういうことですか。なんだ、良かった……」

「多分ね」

「へ?」

「言つたでしょ?　正しい効果かどうか確かめる必要があるって」

「……………いやあああああ——!!!」

「フフフ、どんな効果が出たか……ちやくんと教えなさいよ?」

——この惑星の、薬を作る『薬剤師』と呼ばれる存在は……。

「……!?!」

「小さい缶に的当てつていうのも面白いわね——コーヒー、飲みすぎよ? 控えなさい」

「……イヤダ」

「そう——ねえ、ジョーンズ? 実はまだ試していない新薬、残ってるのよねえ……。しかも、宇宙人にもバツチリ効果を示してくれるように調合した薬品なんだけど」

「控エマス」

「それがいいわ。何せ——身体を壊されると私も困るもの……。ね?」

「……」

——容赦がない。

## 調査記録?迷いの竹林

——この惑星には、『拳で語る』という変わった会話の方法がある。

「死にさらせ輝夜あ!!」

「消し飛びなさい妹紅お!!」

「……」

——両の拳に言葉、思想を込め、相手を殴打することで直接的にそれらを伝達するのだそうだ。

「クソツ……左の腕と足やられちまった……!」

「ハッ! こちとらアンタに両目焼かれてんのよ? そんなの軽いモンじゃない」

「……」

——そして拳で語り合った後には、『真の友情』なる絆が結ばれるのだという。

「まだまだあ!!」

「終わらないわよお!!」

「……」

——分からない。ただ殴り合い、傷つけ合うだけの行為に、会話の特性など含まれて  
いるはずがないというのに……。

「そろそろ……限界じゃ、ないの……?」

「何言ってやがる……それは、そっちの方じゃないか……?」

「……」

——この惑星の住人には、拳に伝達機能が備わっているのかとも思ったが、そうではないらしい。

「……」

「……テイ！」

「……!？」

「ありやりや、やつぱりバレたか——やあ、ジョーンズ。久方ぶりだね」

「随分ナ挨拶ダナ、ラック」

「その名で呼びなさんな。この惑星では『因幡てゐ』って名で通ってるんだから」

「コレハ何ダ？」

「今アంతタに投げたやつかい？ お師匠様が作った薬だよ」

「……」

「そんな目で見るとんじやないよ。大丈夫さ、別に変な効果のある薬じゃないさね」

「本当力？」

「勿論さ」

「……ナラ良イ」

——この方法でなければならぬ、何かしらの意図があるというのだろうか……？

「しつかし、毎度毎度派手だねえ。ちよつと前に暴れ過ぎてお師匠様に怒られたばかり

なんだから、もう少し力抑えりやいいのに。おつ、いいのが入った……こりや今日は妹紅の勝ちかなあ」

「何故コンナコトヲ？」

「これがあの二人のコミュニケーションの取り方だからだよ。憎んで疎んで罵って、衝突して何時しか認め合った。そうやって培ってきた繋がりを絶やさないためには、同じ方法で繋ぎ止めるしか無い。だからあの二人は今でもああやってじゃれ合うんだよ」

「……」

「解せない——つて顔だね。ま、分からなくても仕方ないさ。アンタはこの地球に染まってきたとはいえ、まだ来て日が浅い。そういうのを理解するにはまだまだ見聞が足りてないんよ」

「ソロソロ10年経ツガ？」

「それでもさ。生まれた時からそういう感性に触れていく地球の住人とは違い、ワタシたちはすでに確立した別の感性を持ってここに来た。それが、理解したいのに理解する邪魔をするんだよ」

「……難シイナ」

「他を理解するってのはそういうもんさ」

——この惑星の中でも、特に不可解なものの一つだ。

「あゝ、あゝ、疲れた〜」

「あつ、帰ってきた。二人ともお疲れ〜」

「お、てゐもいたのか？ おい見てたか、私のベストショット！」

「見てたよ〜、アレで決まったと思つたね」

「へへつ、だろお？」

「全くつ！ 根無し草のアンタと違つて私は絶世のお姫様なのよ？ 加減をなさい、加減を」

「絶世つてかただの世捨て人じゃないかお前は……しかも悪い意味の。おいジョーンズ、こいつみたいなのやつのこと外の世界じゃ何ていうんだっけ？」

「あら妹紅知らないの？ 私みたいな存在はモデル、女優、プリンセス、エンプレス、あと——」

「ニートデス」

「それだあ!!」

「違うわよ!!」

「馬鹿なこと言つてないでサツサと帰るよ〜？ もう鈴仙が夕飯作つて待つてるんだか

ら」

「はあくい。妹紅、アンタ今日どうすんの？」

「あつ、今日は食つてくわ。昨日、慧音と飲みに行つて懐が寂しい」

「貧乏人は辛いわね」

「ほつとけ穀潰し」

「仲良シデスネ」

「断じて違う!!」

——ただ…。

「お帰りなさい姫様、てゐ、ジョーンズ。それといらつしやい妹紅」

「おつ邪魔つしまゝす」

「ただいま。えーりん、負けちゃった」

「あらあら、よしよし。今日は竹林を燃やしたり、半径数十mのクレーターを作つたりしてないでしょうね？」

「今日は大丈夫でしたよ」

「そう、ならいいわ。さ、ご飯の用意は出来てますよ」

「えーりん、今日なに？」

「炊き込みご飯と唐揚げです」

「マジで!?! つしやあ、いただき!」

「あつ、待ちなさい妹紅!!」

「落ち着きがないねえ、ワタシも行こつと」

「……」

——この惑星の、『薬剤師』という存在は……。

「あなたは待ちなさいジョーンズ」

「……?」

「てゐから渡された薬を出しなさい」

「ハイ」

「——ねえジョーンズ。この薬はね？ 3時間以内にコーヒーを飲んだ人が触れると変色するようになってるの。しかも、身体の中の成分濃度によって発色も変わるから、3時間以内に何杯飲んだかも分かるのよ」

「……!?!」

「貴方——この色、最低でも5杯は飲んだわね？」

「……スミマセン！」

「ダメよ。夕食後、医療室前まで来なさい。もし逃げ出したりなんかしたら——フッフ、楽しみね」

「……ワカリマシタ」

——やっぱり、容赦がない。

## 調査記録?妖怪の山

——この惑星の『天狗』と呼ばれる種族は、非常に仲間意識が強いという。

「止まれえ！ ここから先は天狗の領域——あつ、なんだジョーンズさんでしたか。お疲れ様です」

「才疲れ様デス」

「文様から聞いています。ちよつと待つてて下さいね？ 多分、もうすぐ来られると思うので」

「ワカリマシタ」

——しかし一転、天狗は自らの領域を汚されるのを嫌い、他者に対して排他的な一面も有しているようだ。

「……つと、やっぱり椀のここにいたわ。へい、ジョーンズ！ やっほー！」

「ヤッホー」

「あれ、はたてさん？ 珍しいですね、お家の外に出てるなんて」

「暗に引きこもりつて馬鹿にされた気分だけど、まあ今は目を瞑りましょう」

「何かご用でしょうか？」

「ええ、ジョーンズにね。ねえ、貴方が文の『文々。新聞』を手伝うようになってから評判はうなぎのぼり、権も無理やり駆り出されることもなくなるし良いこと尽くめだそうね」

「ワカリマセン」

「そうですね？ ジョーンズさんのおかげで私も哨戒の仕事をサボらされずに済んでますし、何よりあのバツタも臭い新聞が広く読まれるまでに普及したのも、貴方の力によるところが大きいです」

「そう！ その実力を見込んでお願いがあるの！」

——また天狗は奔放な妖怪にしては珍しく、縦の順列関係を重んじる社会形態の中で生きる種族でもある。

「どうか……どうか私の『花果子念報』<sup>かかしねんぼう</sup>発展のために、あなた様のお力をお貸し下さい！

「お願いします!!」

「ワカリマシタ」

「いや、ダメに決まってるじゃないですか」

「あつ、文様」

「ゲエツ!!? いつの間につ……!!」

「つたく、油断も隙もあつたもんじゃない。ダメですよ、ジョーンズさん。貴方は私のところで働いてるんですからね? 副業は認めませんよ?」

「ちよつとお、少しくらい良いじゃない! 最近、『花果子念報』の売り上げが停滞気味だから、何か新しい風が必要なのよ!!」

「知らないわよそんなこと! そういうのは自分の力で解決しなさいよ」

「何ですって!!? ジョーンズにおんぶに抱っこが偉そうにつ!!」

「んなつ!!? ちちちちち違いますしい、そんなことありますまいしい、私の力で人氣がチヨベリグなんだしい!!」

「うっわあ……目くそが鼻くそを笑ってる」

——総じて見てみれば、天狗は人間とよく似ていると言えるのではないだろうか?

「と・に・か・く！ ジョーンズさんは貴女なんかには渡しませんよ!!」  
「ああ、抱きついた!? グウウ……それを決めるのはジョーンズよ！ ねえ、私のところに来てよジョーンズ!!」

「なっ!? なんて貴女も腕に抱きついてるんですか！ 離しなさいよ！」

「嫌よ！ アンタこそ離しなさいよ！」

「クツ……このお！」

「負けるかあ！」

「なんか……大岡裁きみたいになりましたね」

——しかも……。

「ジョーンズさんが二人いれば楽に解決出来るんですけどねえ……」

「ワカリマシタ」

「……え？」

「離しなさいったら——きやあ!？」

「そつちこそ——ぶぎや!？」

「あたたたた、ジョーンズさん何を……はい？」

「嘘……？」

「は……え？ ジョーンズさんが……二人？」

「「分カレテミマシタ」

「あ、ああ……私が二人いれば解決って言った……から？」

「え？ あ、うゝゝん……」

「まあ、それなら妥協点……でしようかねえ？」

「釈然とはしないけど……そうね、これで妥協しましょう」

「——私はしないけどな」

「へ？」

「ゲツ!？」

「あつ、て、天魔様!？」

——天狗の社会も人間社会と同様……。

「いつからそこに……?」

「このバカ二人が大岡裁きをしていたときからだ。しかし、目的の人物が二人に分かれたか……うむ、丁度いい」

「あの……天魔様? ジョーンズさんに何か……?」

「まあ、そうだ。実は最近、二人分ほど人手が足りなくてな。ジョーンズくん、君の手腕を見込んで天狗の事務仕事を任せたいのだが、ついてきてはくれまいか?」

「ええっ!」

「そんな……何故ジョーンズさんを!」

「ジョーンズくんは天狗の間でも評判が高いぞ? それこそ、大天狗に等しい地位を与えても、誰も反対しないくらいにはな」

「しかし、だからと言ってジョーンズさんを連れて行く理由には——」

「それがなあ、趣味の新聞記事にかまけて仕事をしない天狗と——」

「ふぐっ!」

「家に引きこもって仕事をしない天狗のせいで仕事が溜まってて急を要するのだ」

「はぐあ!」

「ん? 何だ、二人とも——この男を連れて行くのに不都合でもあったか?」

「い、いえ、何にもございせん……」

「そうか、ならいい。では行こうか」

「ワカリマシタ」

「ではな三人とも。仕事に励めよ？」

「は、はい……」

「了解……です……」

「ありがとうございます！ 懸命に励みます！」

「うむ、良い返事だ椀。二人も見習いたまえ——ではさらばだ」

「お気をつけてえ！——ふう、残念でしたね、お二人とも」

「うぐぐぐ……強力な助っ人が……『文々。新聞』のさらなる発展があ……」

「『花果子念報』の……購読者アップの夢が……」

「きつと、自分の力だけで頑張れつていう天啓ですよ」

「ふぎやあああああああああ!!!」

——世知辛いところもそっくりである。

「あはははは……」

「行くつちやつたゝ行くつちやつた……」

「そんなにしよぼくれないで下さいよ、ほとんど自業自得でしょう?」

「そんなこと言わないで下さいよお!　ようやく軌道に乗って、これからって時に……グズツ……」

「そもそも軌道にすら乗れてない私って……ヒゲツ……」

「やれやれ——あつ、ジョーンズさんから差し入れが残されてますよ?　これは……いつもジョーンズさんが飲んでらつしやる缶コーヒーというものですね。お二人は飲まれますか?」

「うぐうう……飲むう」

「ジョーンズく、カムバくツク」

「はたてさんはいらなみたいですね」

「いるわよお、バカア!」

「はあ……全く面倒くさい。ジョーンズさん、早く帰って来ないかなあ」

## 調査記録?・守矢神社

——この惑星の『社』<sup>やしろ</sup>と呼ばれる場所では、『神』と呼ばれる万象の創造主を奉つてい  
る。

「神奈子様、諏訪子様——私も鬼ではありません。正直に話してくれましたら、お説教は  
少なめにしておいてさしあげます」

「……それは本当?」

「本当ですよ諏訪子様。風祝は嘘をつきません」

「それより足を崩していいかい? ずっと正座じゃ足が痺れちまうよ」

「神奈子様……いえ、構いませんよ。限りなく黒に近いですが、まだ犯人と確定したわけ  
ではありませんから」

——神とは不思議なものだ。たった一柱を指すのかと思えば、『八百万』<sup>やおよろず</sup>と称されるほ  
どに数が多いこともある。

「で——どうする神奈子?」

「知らぬ存ぜぬを貫き通せ。常習犯の私たちへの説教だぞ? 少なくとも見積もつても2,

3時間は確実に拘束される」

「でも……」

「それによく見ろ。早苗のあの能面のような静かな顔を——間違いなくブチ切れてる」

「ジヨーンズの助けは?」

「立ち位置を見る諏訪子。あいつは早苗の後ろに立っているだろ? 言わずもがな敵だ」

「何をコソコソ話しているんですか?」

「いえ、何も」

「……そうですか。まあ、いいでしょう。では、お聞きしますねお二方。明日の祭礼に使う御神酒用のお酒——飲みましたか?」

「いえ、我らは何も存じておりません」

「その言葉に偽りはありませんか?」

「神の名に誓って」

「……分かりました。私はその言葉を信じます」

——火、水、風に月、太陽、絵画、文字、果てにはトイレの神までいるという。

「ではジョーンズさん、調査をお願いします」

「ワカリマシタ」

「え……今、信じるって言わなかった？」

「なのに調査なんてするのかい？」

「言いましたよ？ だから、私がお二方の無実を信じ、それを証明するための調査です」

「そ、そっか……ちよつと神奈子どうする!？」

「露骨にこつちを見るな諏訪子。大丈夫だ、いくらジョーンズでも完全に証拠を隠滅した今、過去でも映さない限りバレやしないさ！」

「そ、そうだよね！」

——また、神は物理的事象のみならず、『利益』と呼ばれる近未来的願望に基づいた恩恵も司るとされている。

「ジョーンズさん、始めてください」

「解析カイシ」

「目が……光って……?」

「これは……ホログラムか?」

『見ろ諏訪子! 蔵の中から美味そうな酒を見つけたぞ!』

『本当!?! 見せて見せて!』

「……へえ」

「うわあ……スゲーやこれ」

「感心してる場合かつ!? 諏訪子これは——」

『あーうー! これ知ってる! 巷で美味いって評判のヤツだよ!』

『本当か!? うっひょい! 早苗も博麗んところに行つていけないし、ジョーンズも天

狗んとここに駆り出されてる——と、くれば今夜はこれで晩酌だあ!!』

『最近、禁酒令が出ててご無沙汰だったもんね! きつと極上の味がするんだろう

なあ〜」

『つしゃあ! レッツパーリィー!!』

『イエーイ!』

「……ジョーンズさん、もう結構です」

——この惑星の中で、神が関与していないものなど存在しないのではないだろうか？

「さて——私の納得のいく弁解があれば今聞きましようか？」

「い、いや……これは、だな、その……な——」

「ごめんなさい私たちが飲みました」

「諏訪子!？」

「いやだつてこれ無理だよ！ 今の見たでしよ？ アレ昨日のやり取りまんまだつた

じゃん！」

「ジョーンズさんの不思議パワーの一つです。過去の投影——私も初めて見たときは驚

きました」

「投影……そんなことできたのかい？」

「ハイ」

「そっかあ……ジョーンズがいた時点で私たちの負けは決まってたんだねえ」

「そういうことです。では、お二方……もう一度正座に直してください」

「……はっ」

——ただ…。

「さつき私が御神酒のことを聞いたとき……何とおっしゃってましたっけ?」

「わ、私たちは……」

「何も存じて……おりません、と……」

「そうですね、私もそのように記憶しております。ではその時、その言葉を何に誓いましたっけ?」

「神の名に……」

「……誓いました」

「そうですね。神の名に——ですよね?」

「は、はい」

「その点を含めて、言わなければならぬことはたーつくさんあります。夜も長いことですし……今日という今日は、じっくりとお話ししましょうか?」

「……はい」

——万象の創造主といわれる神といえど……。

「で——マジで夜通しぶっ続けでお説教されて、挙句に夕飯も朝食も抜き……か」

「3食抜きって言ってたから、昼食もないね」

「……腹減ったな」

「……お腹空いたね」

「自業自得とはいえきついなあ……」

「そうだねえ……」

「はあ……」

「仕方ない。これで誤魔化そう——ほれ、諏訪子」

「ん？ これ、缶コーヒー……ってことはジョーンズからもらったの？」

「ああ。さつきすれ違ったときにこっそりな……」

「そっか。こういうところがあるから逆恨みもしづらいんだよね、ジョーンズって」

「まったくだ——ふう、優しさが染みるなあ」

「……だねえ」

「……また、禁酒令か」

「……一ヶ月つてさ……長いよねえ」

「長いよなあ……」

「……お酒、飲みたいね」

「……飲みたいなあ」

「——昨日の今日で、まだそんなこと言いますか」

「あっ」

——世の中上手く、思い通りにはできないようだ。

## 調査記録?・命蓮寺

——この惑星の『僧』と呼ばれる者たちは、日夜厳しい節制の中で生活している。

「それでは——いただきます」

「「いただきます」」

「イタダキマス」

「やっぱり朝は味噌汁ですねえ。具も久々のワカメ……活力が湧き上がってきます。あつ、聖、お茶です」

「ありがとう星。ワカメは星が好んでいると言ったら、ジョーンズさんが持つてきてくれたのですよ」

「ありがたいです。しかし、幻想郷には海がないのにどうやって……?」

「秘密デス」

「非道に手を染めたのではないなら、深く詮索はしなくてもよいでしょう。彼には彼なりの交流があるものです」

「わふわふ、美味しいです！」

「こちらら響子ちゃん、そんなに慌てて食べないの。ご飯粒がお口についてますよ？」

「わふつ——ありがとうございます聖さま！」

「そういうえばマミゾウさん。ぬえと一輪と水蜜はどうしたんでしようか？　ずっと姿を

見かけないのですが」

「昨日、飲酒してたのが住職殿にバレておったからな。今はその折檻の最中のはずじゃ」

「……またですか？」

「ええ、住職として恥ずかしい限りで……今、雲山に見張りを任せて、仏堂で瞑想を取り  
組ませているところですよ」

「あやつらも中々に懲りんからのお」

「そうですねえ」

「あつ、そうです！　食後に私も加わる予定なのですが、星も一緒にどうですか？　最

近、集中力が乱れると言っていました」

「ああ……参加したいのは山々なのですが、実はこのあとナズの所に行かなくてはなら  
なくて——」

「私モ同行シマス」

「……お主、また宝塔を無くしたんか？」

「は、はい……」

「……またですか?」

「お主もお主で懲りんのお」

「面目次第もございませぬ……」

「おかわり下さい!」

「響子ちゃんはまだもう少し空気を読もうかい」

「はひ?」

——肉食を禁じ、酒を禁じ、繁殖に必要な行為すらも禁じられた中で日々を過ごす。

「ナズ、またお願いします」

「………はあ………またか………」

「ぐっ………すみませぬ………」

「まあいいけどね、そろそろ来るとは思ってたし」

「いつもいつも助かっています」

「しかし20日か………今回は結構保った方かな」

「最長記録ですね」

「その分、厄介なところに転がりこんでないといいんだけどね——ジョーンズ、力を貸してくれ」

「ワカリマシタ」

「お二人ともよろしくお願いします」

「なに自分は関係ないみたいなこと言ってるのさ。ご主人も探すんだよ」

——煩惱を断ち、己を戒めることで、『涅槃』と呼ばれる人知を超えた境地にたどり着くのが目的なのだそうだ。

「——そろそろ昼食なのですが……」

「あ……足があ……!」

「あつ、ダメだこれ立てない」

「すぐには行けなさそうですね」

「う、雲山お願い……運んで?」

「なっ!? 一輪、ズルいぞ! 雲山、私も私も!」

「一輪? 水蜜? 少し大袈裟すぎやしませんか?」

「いやいや、5時間近くも正座していればこうなりますって……」

「むしろ、姐さんは何で平気なんですか？」

「コツがあるんですよ一輪、コツが」

「私たちも結構やつてるはずなのに……ところで姐さん、ぬえは？」

「あそこですよ」

「あそこ——げっ!?! 突っ伏して倒れてるじゃないですか!?!」

「ちよつと聖! あれ大丈夫なの!?!」

「足が痺れてお腹が空いただけだと言ってたので、一応大丈夫だとは思いますが……」

「そうは言っても——うわあ、よく見たらプルプル震えてるよ……」

「……雲山、念のため」

——欲深く、自分に甘いこの惑星の住人が、その境地にたどり着くことなど出来るのだろうか？

「オーライ、オーライ……よろし、降ろして〜」

「ぬえ、アンタ大丈夫？」

「むりい……」

「う〜ん、内角高めギリギリを外してボールつてところかな？」

「水蜜アンタ何言つてんのよ……」

「この前来た参拝者の人から教えてもらった」

「ああ、そう……取り敢えず、雲山にはぬえを運んでもらいましょうか」

「ええ、私たちは？」

「私が運びましょうか？」

「罰則の延長みたいなものですし、姐さんにさせられませんよ。雲山も『任せろ』と言つてますし」

「なら……お任せしましょうか」

「いっちりくん、私も」

「アンタはそろそろ回復したでしょう？ ほら立った立った」

「ええ……はあ、はい」

——ただ……。

「あら、ジョーンズさん。今日も一日、お疲れ様でした」

「才疲レ様デス」

「フフツ、ここでの生活もだいぶ板についてきましたね」

「アリガトゴザイマス」

「いえいえ、率直な感想を伝えただけですので——それと、これはささやかな祝品です」  
「……!?!」

「確かに飲み過ぎは身体に悪いと没収しましたが——飲み過ぎなければ、私からは何も言うことはありません。このまま、節制を覚えていきましよう」

「ハイ！」

「良い返事です。では、私はこれで——お休みなさい」

「オ休ミナサイ」

——我慢に我慢を重ねて飲むコーヒーの味は……。

「ぬえぬえくつと——あつ、ジョーンズ何飲んでるの？」

「……………缶コーヒー」

「何それ……てか、それ美味しいの？ 一口ちようだい？」

「イヤダ」

「ええ、いいじゃん、ケチイ！ ちよつとくらいくれても！」

「イヤダ」

「いいじゃん、いいじゃん！ よこせよ！」

「イヤダ！」

——『グッ』とくる。

## 調査記録?霧の湖

——この惑星では、どれだけ『努力』を重ねたとしても、それが必ずしも『報われる』とは限らない。

「クツソオ〜……また負けたあ……」

「チルノちゃん。そんなに落ち込まないで……ね? 次また頑張ろうよ」

「次……次かあく……ねえ、大ちゃん?」

「なあに? チルノちゃん」

「……アタイ、ガンバったよね?」

「うん、だから今日はいい勝負して——」

「ちがうの。アタイ、勝つためにたくさんガンバってきた。なのに、けつきよくアタイはまた負けちゃった……」

——壁にぶつかる、石に躓く、道を見失う。それぞれによって挫折する理由は様々だ。

「それだけじゃない。リグルにみすちー、ルーミアだって手伝ってくれたのに……アタイ、勝てなかった。みんなのオーエンをムダにしちゃった!」

「……チルノちゃん」

「何より! ずっと一緒にいてくれた大ちゃんが……大、ちゃんに……ウウア……」

「チルノちゃん泣かないで? 私は——」

「アタイ……アタイもう止める! アイツにもうショーブなんて挑まない!!」

——迷い、悩み、何度も自問自答を繰り返し、そして最後には足を止めてしまう。

「チルノちゃん……」

「おおい! 大ちやくん、チルノく!!」

「あつ、リグルちゃん! それにルーミアちゃんにみすちーちゃんも!」

「うんしよつと……よつす。で、どうだった?」

「それがね、リグルちゃん……」

「もうやんないつたらやんないの! みすちーもルーミアもあつちいつて!」

「落ち着きなよチルノ。ルーミアも何か言っただけ?」

「チルノはダメダメだな」

「わかっているもんそんなコト!!」

「あつ、いいや。チルノの荒れ模様見たら察した」

「うん……どうしよう?」

「どうしようつても——へい、ルーミア! みすちー! 集合お!!」

「はぁーい」

「すぐ行くぞ」

——志の半ばで立ち止まってしまうことは、決して珍しいことではないのだ。

「——それで、結局またいつものアレをやるしかないのね……どう思うリグル?」

「ん、まあ仕方ないんじゃない? 他に手が無いわけじゃないけど、これが一番手っ取り早いし。ね、ルーミア」

「そうだな。何より、もう何回もやってるからセリフ回しもスムーズになってきたしな」

「いつもごめんね? みんな」

「いいっていいって、チルノは大切な友達だもん」

「リグルの言う通り。面倒くさいところもあるけど、なんだか憎めないっていうか」

「まったくしようがない奴だよな」

「フフツ——そうだね」

——ただ…。

「さて——チルノ！」

「何よりグ——」

「こんのお……バカもんがあ!!」

「イダツ!? ——何でいきなりビンタするんだ!!」

「何でじゃないよ! 何勝つことを諦めようとしてんの! それこそ私たちのしてきたこと全部無駄にする行為じゃないか!!」

「……え?」

「リグル、タッチ」

「はいよ」

「よし——チルノ！」

「み、みすちー……」

「このお……バカたれがあ!!」

「ふがあ!? ——イ、イタイ……」

「私たちはねえ! アンタに勝ってほしくて手伝ってんの! こんなシヨボくれた姿なんか見たくないんだからね!!」

「……う、うん……」

「みすちー、へーい！」

「へい、タツチ！」

「イツエーイ! ——さて」

「……ルーミア」

「つんのお……バアカちゃんがあゝ!!」

「ぐうあふっ!？」

「もし本当に申し訳ないと思ってるなら、今度こそ勝つて気概を見せてみろよなゝ!!」

「でも……でも、アタイは……!!」

「まったく……大丈夫だよチルノ」

「私たちは何があっても」

「チルノの味方だからなく」

「……グズツ……みんなあ……!!」

——この惑星の住人は、誰かに認められている限り……。

「だから……ね？ チルノちゃん」

「大ちゃん……」

「もう一回、頑張ってみよ？」

「……うん……」

「次は絶対に勝てるよ。なんて言っただってチルノちゃんは『さいきよー』——だもんね？」

「……うん！ アタイ、ガンバる！ それで今度こそアイツをやっつけて、アタイが『さいきよー』だってショウメーしてやるんだ!!」

「うん！ その意気だよチルノちゃん！」

「やるぞおっ!!」

「うん。やっぱりこういう馬鹿っぽい方がチルノらしくていいや」

「リグルの言う通りだねえ。見てることがちが恥ずかしいくらいが丁度いい感じ」

「これにて一件落着つてとこだなく」

「ん？ なんか言った？」

「いや、なくんにも」

「そっか、ならいいや！ よおーし、大ちゃん！ リグル！ みすちー！ ルーミア！

さっそく帰ってトツクンだあ!!」

「「「「おおお——！」「」」」

「今度こそ、チューゴクに『だるまさんがころんだ』で勝つぞお!!」

「「「「おおお——！」「」」」

「行くぞお！せえくの——」

「「「「えい！ えい！ おおお——!!!」「」」」

——『諦める』という選択肢は、選ばないようだ。

「いやあく、何度見ても熱い友情のワンシーンはいいですねえ！ 缶コーヒーによく合いますー！」

「……………」

「…………あの、そんな目で見ないで下さい。違うんですよ、私が大人気ないんじゃないんで、チルノちゃんが弱すぎるだけなんです」

「……………」

「だって、私は特に変なことしてないのに…………なんなら負けるつもりだってあったのに、向こうが勝手に自滅するんですよ？ それじゃどうしようもないじゃないですか

!？」

「……………」

「私じやどうにもできないんです！ だからお願いです、そんな冷たい目で見ないで下

さい!!」

「……………仕事ハ？」

「……………え、そつち？」

「報告ダナ」

「い、いやいや、それも待つて下さいよ！ これには理由が——」

「モウ遅イ」

「え？ —— あっ」

## 調査記録？太陽の畑

——この惑星の住人は『珍しい』というだけで、やたらと過大な評価をつけたがる。

「この子もそろそろ——寿命かしらね」

「そうなの？」

「ええ。元から身体の弱い子だったから、そう長くはないと思っていたけど——最近の衰弱ぶりからして、あともって3日といったところかしら？」

「……治らないの？」

「……ええ。手は尽くしたんだけど、結果は見ての通り。葉っぱも茎も弱々しいままだったわ」

「……幽香、悲しそう」

「そう？ ううん……そうかもしれないわね」

——例えそれが如何に見察みすぼらしい代物であろうと、『珍品』と称されるだけでこの上な

いほどに絶賛される。

「この子はねメデイ……ずっとずっと見てきた夢があるらしいの。周りの花を咲かせた子たちが教えてくれたわ」

「夢ってどんな？」

『花を咲かせたい』……ですって」

「お花を？」

『自分が見向きもされない雑草なのは分かってる。だけどせめて、自分が一番輝ける姿をほんの少し、ほんの数人でもいいから見てもらいたい』……悲しい話よね。この子の種なら決して難しい夢じゃなかったはずなのに……」

「そう、なんだ……」

——その裏では、価値あるはずの代物が多く伝播していることを理由に度外視され、日の目を浴びることなく劣化して消えていく。

「さて——そろそろお水をあげないと……」

「あつ、なら私がお水持つてくる！」

「あら、結構重いわよ？」

「大丈夫！ 私もこの子には元気になってほしいから！」

「メデイ……フツ、ありがとう。じゃあ、お願いしようかしら？」

「任せて！ 行ってくるね!!」

「あらあら——そんなに慌てると転んじやうわよ？」

「へ～きへ～き！」

「もう……やれやれね」

——この惑星では『主役』は珍品であり、ありきたりは『脇役』でしかないのだ。

「——で？ その貴方。いい加減、隠れてないで出てきなさい」

「……」

「人間……にしては雰囲気独特ね。まあいいわ、私は今、気分が落ち込んでいるの。失せなさい」

「……」

「聞こえなかったの？ それとも意味が通じなかったのかしら——『見逃してやるからとっとと帰りなさい』と言っているのよ」

「……」

「……私を指差したりなんかして、何のつもり？」

「チガウ」

——ただ……。

「違うって、何が違——」

「ああ——っ!!? ゆ、幽香！ 見て、見て!!」

「メデイ？ どうしたのそんなに大声出して？」

「は、花……お花がっ!!」

「花？ 花がどうか……え？」

「この子、お花を咲かせてるよ!!」

「嘘……この子には花を咲かせるどころか、頭を持ち上げる力すら無かったはずなのに」

「でも咲いてるよ！ スゴイスゴイ!!」

「確かにすごいけど……でも、何で突然——まさかっ!？」

——この惑星では、主役になれない脇役だとしても……。

「——いない。まさか、私が気配に気付かないなんて……あら？　これは……」

「どうしたの幽香？　それ何？」

「これは……確か外の世界の飲み物よ。この上の栓を開けて飲むの」

「ふーん……それよりさ！　一緒にお花見ようよ！」

「……」

「……幽香？」

「……そうね、一緒に見ましようか」

「うん！　あの子のお花ね！　白くてちっちゃくて可愛いんだよ！」

「フフツ、最後まで諦めずに咲かせたお花ですもの。とつても素敵なお花に決まっているわ」

「うん！」

——脇役には脇役の、根強い『魅力』がある。

「ありがとね——不思議な人間さん」

「幽香? どうしたの?」

「何でもないわ。さあ、いつまでも私たちが独占してちゃ勿体無いし、お家でおやつでもいただきますしよっか」

「ワァーイ!」

## 調査記録？八雲家

——この惑星の住人は、『無謀』と分かっているながら、それでも強行な手段に踏み切ることがある。

「『八雲紫、17歳です！』——どう、藍？」

「全然ダメです。目標にしている『若者らしさ』には遠く及びません」

「そう……やはり簡単にはいかないわね。藍、改善点を教えてちょうだい」

「そうですね……先程の発声には、会社の面接を受けているときのような固さがありました」

「固さ……か」

「はい。なので、もつところ——声を弾ませて、甘ったるい耳触りになるような感じを意識して下さい」

「なるほどね、分かったわ！ よし、もう一度——」

——まったく理解が及ばない。何故わざわざ苦難と知る道を選ぶのだろうか……?!

『八雲ゆかり、17歳でエース!』——どう!?

「違う——違うんです紫様! セリフを文字にしたとき、所々に星マークとかハートマークが付くような……そんなバカっぽい若者の弾ける『若さ』が感じられません!」

「ぐっ……難しいわね。何度かリトライしてるけど、めぼしい成果も上がらないし」

「大丈夫ですよ、確実に前には進んでるはずですよ!」

「実感無いわあ。そもそも弾ける若さをどうやって表現したらいいのよ? 皆目、見当もつかないのだけど」

「た、確かに……私も言ってみたものの、どう助言すればいいかまでは……」

「うくん……どうしたものかしら?」

「ですがご安心下さい! 資料となりそうなものをこちらに用意してございます!!」

「本当っ!? でかしたわ藍! 流石、私の式神といったところね!」

「さっそく研究しましょう!」

「ええ!」

——自己満足……と片付けてしまうには、賭けている意気込みが並の強さではない。

「髪型はツインテールに——服装も薄いピンクのエプロンドレスに着替えたわ。変じゃないかしら？」

「素敵です！ 今の紫様の外見は、完全に今時の若い子を再現されています！」

「そう？ やつぱりそう思う？ うん！ やつぱり、資料があるのと無いのでは拂り具合が違うわね！」

「はい！ ですが、まだそれで完成というわけではありません。気を緩めてはなりませんよ？」

「分かってはいるわ、今はただ外見を真似ただけ——笑顔、発声、オーラ……まだまだ身につけなければならない壁は厚いものね！」

——望んだ結末が、確実に待っているわけではないだろうに……。

「その意気です！ では笑顔から確認していきましょう。まず笑顔は無邪気に——いつもの胡散臭さを出したら台無しになってしまいますからね？」

「分かったわ」

「次に発声ですが——資料によると『ふええ』や『はわわわっ』のような一見、意味の無

さそうな言葉が可愛らしさを引き立てるようです。『間延びした喋り方』と組み合わせ  
て、トライしてみましよう」

「ええ、やってやりますとも！」

「最後にオーラですが——恐らくこれは、全てをマスターしたときに自然と身につくも  
のと思われまます」

「……つまり、下手に手を加えるべきじゃないのね？」

「その通りです。なので、笑顔と発声に重きをおいて練度を高めていきましょう」

「了解よ——ありがとね藍。おかげで、ついにゴールの横断幕が見えてきたわ」

「礼などいりませんよ。私は紫様の式でございますから」

「藍……」

「紫様……」

——この惑星の住人には、不思議なことばかりだ。

「……」

「ホント、アホらしいわ——アンタもそう思うわよねジョーンズ？」

「……才前力」

「久しぶりね。こつちに顔出してみれば、アンタがいるもんだから驚いたわ。缶コーヒーなんて飲んで余裕そうじゃない」

「イイノカ？」

「大丈夫よ。ちゃんと防音バリヤーを張ってるもの……例えスキマを使われても、こつちの声は向こうには聞こえやしないわよ」

「ソウカ」

「ええ——あつ、でも、もういつそのことビシツと言つてやるのもアリかしら？　そうすれば、しばらくは大人しくなるだろうし……」

「ヤメテオケ」

「冗談よ——下手なこととして関係を悪化させたくはないもの」

「……」

「しっかし毎度毎度、こんなくだらないことに私を巻き込んで——あゝあ、本当……頭痛が痛いわ……」

「……意味」

「重複してるって言いたいでしょ？　馬鹿ね、それくらい頭が痛いってことよ。察しなさい」

「……」

「ねえ、もういいんじゃない？ 私、そろそろ故郷の自宅が恋しいんだけど」

「……マダダ」

「……あつそ」

——ただ……。

「——『はううう！ やくもゆかりい♡ じゅうななさいでえくすう☆』」

「……」

「……」

「あ……あああ……!!」

「……藍？」

「か——完璧です！ 私には確かに、セリフ中のハートマークも星マークを読み取るこ  
とができました！」

「じゃ、じゃあ……もしかして……!？」

「はい！ 紫様から若さがオーラになって溢れ出ています！ もう誰にもBBANなんて言わせません！」

「や、やった……遂にやったのね藍！」

「紫様あ！」

「……」

「………うわあ……」

「……」

「もの凄いはしやぎ回ってる……え、あんなのでいいの？」

「………知ラン」

「やったやったあ!! あつ、そうだ——ちえん橙！ 橙ええええん！」

「ゲツ……」

「……呼バレテルゾ」

「分かってるわよ……チツ——ジョーンズ。この馬鹿騒ぎが終わったら、アンタが飲んでるのと同じヤツ……私の分も用意しなさいよ？」

「ワカッタ」

「橙ええええん！ いないのかあああ!？」

「……ハアア……—はい！ 藍しやま、何ですかあ？」  
「……」

——この惑星の、『猫を被る』という表現は……。

「おお、来たか橙！ さあ、見るんだ——新しく生まれ変わった紫様の姿を！」

「紫しやまの……わあ！ 紫しやますごく可愛いです！」

「本当？ そう思う？ 私って若く見える？」

「はい！ とてもお若く見えますし、人里を歩けば10人が10人振り返るくらいです  
!!」

「そう……そう!!」

「紫様！」

「ええ！ これで自信がついたわ！」

「努力が遂に報われましたね！」

「お二方とも流石です！ 橙もとても嬉しいです!!」

「……………」

「これで霊夢にも——！」

「宴会で皆にお披露目を——！」

「橙もいいと思います——！」

「……………」

——言い得て妙だ。



「『パルシー』じゃないわよ『パルスイ』よ！ 間違えるなんて妬ましい!!」

——意味もなく泣き出す者もいる。

「おゝい主役、呑んでるかゝい？」

「イタダイテマス」

「そうかいそうかい！ よおゝし、その調子でジャンジャンいつちまおう！ 杯を渡しな、この勇儀さんが直々にお酌してやるよ！」

「結構デス」

「そう遠慮しなさんなつて！ ダハハハハハッ!!」

「イテツ!？」

「ちよ、勇儀姐さんストップ、ストップ！ 強く叩き過ぎですよ、ジョーンズ沈んじやつてるじゃないですか!？」

「ハハハッ——へ？ ……あつ、悪い悪い！ ちよいと加減を間違えちまつたよ、アハハハ!!」

「笑い事じゃないですよ……おい、大丈夫か？」

「大丈夫、デス」

——やたらと馴れ馴れしい者もいれば……。

「キャハハハハハハハッ！ ……あつ」

「ガツハハハハッ！ ——ん？ キスメちゃん、どうかしたかい？」

「……吐きそう」

「……え？」

「あつ、もう無理——」

「いや、ちよつ、待つ——」

——逆に酒に吞まれてしまう者もいたり、酩酊時に現れる傾向に一貫性は無い。

「……」

「おらお！ もつと酒持つてこんかい！」

「うああ……アイドルなのに、言葉がらんぼう……妬ましい……」

「そんなメソメソすんなよパルスィ！ 酒の席は笑ってナンボだろうに！ ナハハハハッ！！」

「違う……私は吐いてない。ただちよつと女子力が溢れてしまっただけ……」  
「……………」

——種々様々に暴走するこの者たちを、思うように制御する手段など有りはしないのだ。

「お前らあ！ 酒の追加持ってきたぞお!!」

「何だとお!? 良くやった、あとで私の直筆サインやるよ!」

「お酒……欲しい……」

「潰れそうなのにまだ飲むのかパルスィ!? つしやあ、いい根性だ!」

「私は……いや、飲む!」

「……………」

「まだまだこつからだあ!!」

「うおおおおおおおおおおお!!」

「……………」

——ただ……。

「アツハハハハハハハツ!! あつ、な〜んかこの部屋、熱くなってきぞ〜?」  
「飲み過ぎじゃないつすか〜?」

「そんな訳ないじゃん——うう〜ん、やつぱ暑い〜」

「わたし……眠………妬い……ゆうぎ……」

「おいおい、さつきまでの根性はどうしたんだい? まだまだいける——おや?」

「すう……すう……」

「ありやりや……ホントに寝ちまった……」

「——あつ、やつぱ無理だわこれ。飲んだら吐いちゃ……女子力が溢れちゃう」

「あいよ、水。今日はもう止めといた方がいいぞ?」

「………うん、そうする」

——この惑星の、『宴会』と呼ばれる行事は……。

「……………」

「んああああ暑い！ 暑い暑い！ もう服なんか着てられつか!!」

「ああっ！ ヤマメちゃん、流石にアイドルが脱いじや駄目つすよ!」

「うるさ——い！ 私がいいつつたらいいの!」

「おおい、ジョーンズ。ちよいとパルスィに膝貸してやっておくれよ、寝ちまつてさあ  
く。私はまだ酒飲みたいから、アンタに任せたいんだ。いいかい?」

「大丈夫デス」

「そつか! なら、任せたよ」

「ハイ」

「すう…………すう…………」

「…………」

「すう……すう……エへへ……」

「ああ、ダルい……女子力が……」

「……」

「あつ、膝枕……パルスイいいなあ。ジョーンズさん、私も膝借りていい？」

「ハイ」

「ありがとう——ああ、ちよつと楽になった気がするわあ〜」

「……」

「……あれ、ジョーンズさんも顔赤いよ？　もしかして、けっこう酔ってる？」

「問題アリマセン」

「……まだまだ余裕？」

「ハイ」

「そっか……なら、私も少し寝させてもらってもいい？」

「大丈夫デス」

「じゃあ……お言葉に……甘えて……」

「オ休ミナサイ」

「うん——くう……くう……」

「……」

「……」

——素晴らしい。

## 調査記録：地霊殿

——この惑星の住人は、常に何かしらの『秘密』を持って生活している。

「抜き足、差し足、忍び足。どれどれ、さとり様は——いない。よし！今のうちに……」

「何が良しなのかしら？」

「ひゃあ!? さ、さとり様……いつの間に後ろに？」

「私に見つかるの不都合なことでもあったのかしら？」

「め、めめめ、滅相もございません!! では私はこれで——」

「——お憐？」

「は、はいいい！」

「ふうん……貴女、私に隠していることが——」

「ありません！ 私に疚しいところなんて、なくんにもありませんよお!？」

「——そう、お使いの帰りに余ったお金でお魚をねえ……」

「……」

「——しかも一匹に抑えきれず、結局、残金すべて叩はたいておかわりしまくった……と？」

「……さらばっ！」

「逃がすわけではないでしょう！」

「しまつ、あし——グピャ!？」

「貴女これで何度目よ!? 今日という今日は絶対に許さないんだから!」

「ひ、ひいいいいいい!!?」

「まったく……心が読める私に嘘が通じるはずないでしょうに」

——物理的なものであれ、精神的なものであれ、隠さなければならぬ理由はそれぞれだ。

「あつ、さとり様だ! さとり様あゝ!!」

「あら、お空……どうかしたの？」

「いえ、さとり様を見かけたので声をかけただけです!」

「……そう」

「あつ、でもそうだ! さとり様、お隣を知りませんか？」

「あら、何か用があるの？」

「ええつとですぬ——うにゆ？ 何だっけ？」

「……忘れちゃったの？」

「うにゆく……はい！ 忘れました！」

「なら、今はお仕事に戻りなさい。お燐は今、とても忙しいみたいだから」

「分かりました、じゃあ戻ります！」

「はいはい」

「それ、ビュウ——ン！」

「………あの子ども、もう少し何とかならないものかしら？」

——保身のため、誰かのため、『最善』と思う手段を模索した結果、秘密という手段にたどり着いたのだろう。

「うくん……決めた！ 今日、明日はお姉ちゃんの服を借りよう！」

「……」

「そうと決まれば——あつ、ジョーンズだ！ それに——おお、グッドタイミングだよ！」

「何デスカ？」

「チミが持つてる洗濯の山から、お姉ちゃんの服をいただきたいのだよ」

「コレデスカ？」

「そう！ それだよ！ ちよくだい？」

「イイデスヨ」

「ワア〜イ！ ありがとう〜！」

「……」

「それじゃあ、さっそく着替えて出かけてくるね！ —— バイバ〜イ！」

「バイバイ」

「……………あつ、そだ。これ、お姉ちゃんには内緒ね？」

「ワカリマシタ」

「ん、よろしい。じゃあ、今度こそバイバ〜イ！」

「バイバイ」

——そのため、この惑星の住人は、秘密というものが明かされるのを極端に恐れる傾向がある。

「そうですね——だから、秘密を赤裸々に読み取れる私は忌み嫌われているのです」  
「……………!？」

「何故——ですか？ 簡単な話です。私の能力は『聞く』ものじゃなく『見る』もの。貴方の張っている特殊シールドの効果では妨害できないからですよ」

「ナルホド」

「——ええ。貴方の素性、他の調査員、短い期間でしたが、それなりに読み取らせてもらいました」

「ナラ」

「はい、もう既に——」

「……………」

「——いえ、驚きましたよ？ 記憶の操作や改竄があったというのもあります、まさかあの子が宇宙人だとは微塵も思っていませんでした」

「……………」

「ただ——『驚いた』以上に……シヨックの方が大きかったので」

「……………」

——ただ…。

「——いえ、何も変わりませんよ」

「……………」

「確かにシヨックでしたがそれでも——私があの子のことを大切に思っているのに、愛していることに変わりはありません」

「……………本当力？」

「はい。これからも今までと同じ——何も変わりはありません」

——この惑星の『愛』は……。

「あの子も大切な——私の家族ですから」

——全てを受け入れる。

「……そう、バレちゃったんだ」

「スマナイ」

「いいの。さとり様の能力をちゃんと正しく理解できていなかった私が悪いんだから」

「………」

「そっか……なら、もうわざわざ『子供っぽい』人格で表面を覆い隠す必要もなくなったのか」

「消スノカ？」

「……いいえ」

「………」

「さとり様が愛しているのは、あくまで造られた人格の方。本来の私じゃないわ」  
「……ソウカ」

「そうよ……でも残念ねえ、一度くらいちゃんと挨拶しておきたかったわ」

「無理だ」

「分かってるわよ——あくあ、さとり様の能力に対処するためとはいえ、近くに来たら強制的に人格が入れ変わるようになるんじやなかった」

「……」

「……」

「……」

「……ねえ、ジヨーンズ？」

「何ダ？」

「調査ってさ——まだ掛かりそう？」

「アア」

「そう——ならもう少し、ここにいられるのね？」

「才前……」

「分かってる。分かってるけど——せめて、今は……」

「ソウカ」

「……うん」

「……ホラ」

「あら、差し入れ？　——ありがと、もらうわ」

「……」

「……うん、苦いなあ——とつても苦い。まだ『私』が『私』だけだった時は飲めたのに」

「子供ツポイカラナ」

「さとり様やこいし様やお燐にも、甘いものばかり食べさせてもらってるしね」

「ソウダナ」

「みんな、いい子たちだよね」

「……アア」

「……もしもの時、私は『地霊殿』のみんなを割り切ることができるのかなあ？」

「……」

「私もだいぶ——ここに染まってきちやったなあ……」

## 調査記録：白玉楼

——この惑星の『冥界』という場所では、死して魂のみとなった住人たちが、新たな生を得る『転生』の順番を待っている。

「幽霊さん、次の料理運んで下さい！」

《はい、いつてきます！》

《こつちも唐揚げ揚げりましたぞ！》

「ありがとうございます——よし！ このペースなら、変な注文さえ来なければ無事終われそうです」

——その順番を待つ間、魂たちは『幽霊』という形態を取り、生前の肉体を再現して、冥界の主の下で働かなくてはならない。

《妖夢さん！ 春巻きと炒飯のおかわり注文が入りました！ 至急とのことですよ！》

「ええ!? 炒飯はともかく、春巻きはもう作り置きがないのに……。どうしよう、また作らないと——誰か手の空いてる方はいませんか!？」

《こっちは手一杯です!》

《むしろ手を貸してほしいくらいですよ!!》

《ちよいと忙しいが、炒飯なら何とかやれそうですね!》

「なら炒飯はお願いします!」

《ガッテンでさあ!》

「春巻きは——ええい、仕方ない。ジョーンズさん、分身お願いします! 出てきた一人は私の半霊と春巻きを作って下さい!」

「ワカリマシタ」

《妖夢殿! 空いてる皿が無くなりそうです!》

「ああ……手が……手が回らない」

《妖夢ちゃん大変! 買い溜めしておいた豚肉が切れたわ!》

「嘘……」

《妖夢さん! 追加で回鍋肉の大盛りもお願いします!》

「イヤアアアア——!!?」

ホイコーロ

——定年の後どころか、死んだ後にまで働かなくてはならないとは……まったくご苦  
勞なことだ。

「——ご馳走さま、今日の晩ご飯もとっても美味しかったわあ〜」

「やつ……やつと終わった〜」

《つ、疲れた……》

《幽々子さま……ここ最近、一段と食べられるようになりましたね》

「んん、なんでかしらね〜？ ひよつとして最近涼しくなってきたから、暑くて食欲減ってた分が繰り越してきたのかも〜」

「ええ……」

《……冥界って基本、涼しいっすよね？》

《まあ……そうね》

《体温の低い幽霊や靈魂が集まってる場所だものね》

「あらあら、そうだったかしら〜？」

「……もういいです」

——そして転生した後もまた、きつと今と同じように働かなくてはならないのだろ

う。

「それじゃあ、ご飯も終わったことだし——」

「あつ、お風呂に入られますか？ 多分、そろそろ沸いてる頃だと思いますので——」

「——食後のデザートを所望するわ」

「……………え?!」

《冗談でしょ?》

《あんなに大量に食べたのに…………》

《まだ食べるっていうのっ!?!》

「ほら、『デザートは別腹』って言うじゃない?」

「確かにそうですが…………」

《あと4日は持つ備蓄を平らげたあとにデザートは…………》

「常識外デス」

「あらあら、フツツ…………おかしなことを言うのね? 幻想郷では常識に囚われちゃいけないのよ?」

「目に優しい方の巫女さんだつてそう言つてたじゃない」

——最早この惑星の住人にとって、『労働』こそが『存在意義』なのではないかとさえ

思えてならない。

「いや、でも……」

「どうしたの？ 早くデザートを……あつ、分かったわりクエストを待つてるのねっ！」

「いえ、そうではなくて……」

「今の気分はそうねえ——白玉を使ったお菓子！ 善哉とかお団子なんかいいかも」

「だからですね？ その……」

「いや待って……ここ最近マスターしたって言ってた和風ケーキなんかも捨てがたいわね……」

「あの、私の話を……」

「うくん……決められない。まあ、いいわ、作れるだけ作ってきてちょうだい」

《……諦めましょう、どっちみち私たちには最初から作るという選択肢しか無かったですから》

「……………はい……………」

《お気を確かに……では幽々子様、しばしお待ちを——》

「行キマシヨウ」

「……はい」

「なるべく早くお願いね」

「……ハアア……」

——しかも……。

「………ああ………星が………」

「才疲れ様デス」

「あつ、ジョーンズさん……お疲れ様です。他の皆さんは？」

「帰ラレマシタ」

「そうですね……まあ、最後の方は死屍累々でしたからね。早く帰りたかったんでしよう」

「………」

「………私もそろそろ休みたいです」

「………ドウゾ」

「え？ あつ、お饅頭だ。ありがとうございます！」

「……」

「それにこの虹色の筒は……以前、幽々子様に奪われていた缶コーヒーというものです  
ね？ 記憶にあります」

「……」

「なるほど、缶コーヒーは飲み物だったんですか……。甘いような苦いような……よく分  
からない感じですよ」

「……」

「でも人心地つくには丁度いいですね……」

——この惑星の住人は、どう足掻いても……。

「フウ……いい感じに休めた気がします。ご馳走様でした」

「ハイ」

「疲れた身体には甘いものが染み渡りますね」

「ワカリマス」

「……………さて——」

「……」

「身体も休まりましたし、お腹も少しですけど膨れました……」

「……」

「それでは、そろそろ——」

「——明日の朝食を採りに行ってきます」

「才願イシマス」

「はい、お留守番は頼みますね？」

「任せテクダサイ」

「多分、丑の刻前には戻れると思いますので——」

「ハイ」

「では——いってきます」

「……イッテラッシャイ」

「……………」

「……………」  
「……………」  
「……………」

「……………あゝあ、この時間でも人里の市がやってたらなあ……………」

——働くことから、逃げられない。

## 幻想郷調査結果報告書

——この惑星には、強力なバリアーによつて隔離された『幻想郷』と呼ばれる空間がある。

——そこは、『人間』と『人間ならざる者』たちが手を取り合い、共存して生きる世界だと言ひ伝えられている。

——さらに、聞くところによると『幻想郷』は、閉鎖された空間であるが故に、独自の文化を築き上げた場所でもあるのだとか……。

——それ以上のことは、情報の真偽が曖昧であり、詳しく調べることは出来なかつた。

——それが意図して隠されているのか、はたまた『幻想』であるがために不明瞭なだけなのかは分からない。

——どちらにせよ、この惑星の中でも、特に異質な場所であることに間違いはないだろう。

——『一見の価値あり』。私は調査員として、その『幻想郷』の調査に乗り出した。

——とは言え、やることは外の世界と変わらない。

——各勢力の下に労働者として潜入し、その内情と『幻想郷』の実態を詳つまびらかにしていください。

——『幻想郷』の象徴である神社、真紅の館、冥界の管理所など、多くの場所を見て回り、記録を残してきた。

——そして今、私は調査を終えて報告書をまとめている。

——多少の想定外はあったものの、調査は概ね成功と言える成果を挙げられただろ

う。

——そして、各地を転々とした調査の末に導き出した結論が——。

——『まったく……どこへ行っても、相も変わらずくでもない惑星だ』

——この一言に尽きる。

——結局のところ、この地も結界の外の世界となんら変わりはなかった。

——過酷な労働、耳障りな喧騒、勝手気ままな住人たち。

——不便で、忙しく、どうしようもないくらいに住み辛い。

——閉ざされた世界で、独自の文化を持つなどと銘打っていても、見えてくる景色は

同じものでしかなかった。

——それが、『幻想郷』の各地を見て回り、調査して出した私の結論だった。

——……そう。私はそう結論付けたはずなのだ。

——なのに何故、私はまだ『幻想郷』に留まり、調査を続けているのだろうか？

——もうこの地に留まったところで、新しく見えてくるものも無いだろう。

——この惑星の住人たちの傾向を測るなら、この場所よりも外の世界の方がいいはずだ。

——ここに留まり続ける理由など、どこにも無いというのに……。

『貴方も気をつけておいた方がいいですよ？ 貴方と私はよく似ていますから、下手するどつぷり浸かってたなんてことになりかねません』  
『私もだいぶ——ここに染まってきちやったなあ……』

——楽しかったというのだろうか？ この地の調査が……。

——スカーレットやクロウのように、同じ穴の貉になったというのだろうか？

——しかし、目を閉じ、この空間での体験を思い起こしてみても、脳裏を過ぎるのは面倒な記録ばかりだ。

——ならば私は一体、この『幻想郷』の何に心を惹かれたというのだろうか？

「……ワカラナイ」

——答えは……出ていない。

——ただ…。

「ハイ！ お待ちどーさま、外の世界で流行ってるっていう『ケーキ』ってお菓子だよ！  
種類は——何つつたつげな？ アハハツ、忘れちまったよ！」

「アリガトゴザイマス」

「飲み物は…要らないんだったね？」

「持参シテキマシタ」

「はいよ。そんじゃ、ごゆっくり〜」

「イタダキマス」

——この惑星の、缶コーヒーだけは…。

「——フウ——」

——私の心を、  
掴んで離さない。

『このろくでもない、  
すばらしき世界』